

1 いと高き神のもとに身を寄せて隠れ、全能の神の陰に宿る人よ、2 主に申し上げよ。「わたしの避けどころ、砦、わたしの神、依り頼む方」と。3 神はあなたを救い出してください。仕掛けられた畏から、陥れる言葉から。4 神は羽をもってあなたを覆い、翼の下にかばってください。神のまことは大盾、小盾。5 夜、脅かすものをも、昼、飛んで来る矢をも、恐れることはない。6 暗黒の中を行く疫病も、真昼に襲う病魔も。7 あなたの傍らに一千の人、あなたの右に一万の人が倒れるときすら、あなたを襲うことはない。8 あなたの目が、それを眺めるのみ。神に逆らう者の受ける報いを見ているのみ。9 あなたは主を避けどころとし、いと高き神を宿るところとした。10 あなたには災難もふりかかることがなく、天幕には疫病も触れることがない。11 主はあなたのために、御使いに命じて、あなたの道のどこにおいても守らせてくださる。

◆教会の祈り

いつくしみ深い父である神様、

あなたの独り子イエス・キリストの復活によって、勝利と喜びに満たされた主の日の朝、あなたが私たち一人一人を御心に留めて下さり、今日も、福音の御言葉をもって罪の赦しと救いを宣言してください。深く感謝いたします。また、主であるあなたは私たちを見守る方であり、わたしたちの気づく時も気づかない時も、あなたの愛と慈しみによって、わたしたちが守られ支えられていることのゆえに御前に感謝いたします。

あなたは、私たちがどれほどあなたから遠く離れても、決して私たちを離れることなく、いつも私たちがあなたのもとに立ち帰ることができるように助け、導いてくださいます。しかし、わたしたちは、幾度も不信仰に傾き、御言葉を思わず、あなたの御力に頼ることをせず、諦めや絶望、怒りや嫉妬、罪の思いにまかせた言葉や行いを重ねて参りましたことを御前に深く懺悔いたします。どうか、わたしたちの心の思いが、言葉と行いが、いつもあなたの御心にかなうものでありますように。キリストがそうされたように、わたしたちも神である主を愛し、また自分を愛するように隣人を愛して生きることができるよう、わたしたちの信仰を強め導いてください。

教会の頭なる主よ、あなたの教会を聖霊によって導いてください。あなたが呼び集められたあなたの民の一人一人に、そば近くいてください。新型コロナウイルスの感染拡大によって、礼拝を行うことができない教会があり、また私たちの教会においても、この場に集うことのできない兄弟姉妹がおられます。インターネットやCDを通して、それぞれの場で今あなたを礼拝しておられる私たちの兄弟姉妹のことを覚えます。どうか、そのところに主なるあなたが親しく共にいて下さり、限りない平安と喜びを豊かに与えて下さいますように心から祈ります。私たちが困難を前にして、脅えたり、途方に暮れたりすることなく、堅い信仰をもって私たち自身とその歩みを、恵み深い主に委ねることができますように。一日も早く、この困難な状況が解決に導かれ、いつもの

ように兄弟姉妹共々に、あなたに喜びの礼拝をお捧げする日がくることを切に祈り願います。神様、わたしたちだけでなく、多くの子どもたちも教会に集うことが出来ないでいます。一人一人の子どもたちをあなたが守り、育み、日ごとに必要な恵みを豊かに備えてください。

今の厳しい境遇の中で、り患されて治療を続けておられる方々、その看病と医療にあたっておられる方々、健康に不安を覚えておられる方々を守り支えて下さい。仕事や日ごとの暮らし、子育てや介護に困難を抱えておられる方々に、必要な助けと支えとが速やかに与えられますよう祈ります。

将来を与え、希望を与えて下さる神様。今日を生き、また明日を生きるために、私たちが御言葉によって力づけて下さい。信仰によって私たちの心と魂を守り、私たちのために、主なるあなたが最善をなしてください。この祈りを、私たちの主、イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

◆説教

信仰をもって生きるとは、神様を信じて生きることです。今日、この礼拝では詩編91編の御言葉が開かれています。ここには、神様を信じて生きるとは一体どのような信仰に生きることなのか、そのことがはっきりと語られています。

詩編91編の御言葉は次のような呼びかけをもって始まります。「1 いと高き神のもとに身を寄せて隠れ、全能の神の陰に宿る人よ」。

どのような人が呼びかけられているのでしょうか。「神のもとに身を寄せて隠れ」る人、そして「全能の神の陰に宿る」人とあります。詩編を書き記した記者は、この御言葉を聴く信仰者に向かって、「神のもとに身を寄せて隠れ」る人、「全能の神の陰に宿る」人と呼びかけました。神を信じるとは、神のもとに身を寄せて生きることであり、全能の神の陰に宿る場を与えられ、そこに生きることだということが判ります。これは「神様の恵みにその身を委ねて生きる人」のことです。信仰とは、神が恵み深い方だということを知ることです。ペトロの手紙の2章3節に「あなたがたは、主が恵み深い方だということを知りました。」という御言葉があります。神を知るとは、神が恵み深い方であることを知ることであり、信仰とは、その恵みの神様に信頼して生きることです。

しかしこの詩編91編の冒頭部分は、信仰を持って生きる人の姿ばかりを語っているではありません。詩編の御言葉は、わたしたちが何を信じ、どのような神様を信じているのかという事を語ります。それはとても大切なことです。1節を改めて見ますと、「1 いと高き神のもとに身を寄せて隠れ、全能の神の陰に宿る人よ、」とあります。ここに、私たちの信じる神は「いと高き神」であり「全能の神」と記されています。神が「いと高く」、「全能である」とは、一体どういうことでしょうか。続く3節を見ると「3 神はあなたを救い出してください。」とあります。これが、神が全能であるということの最も核心部分です。神は、私たちを救うということにおいて全能なのだということ、神は、あなたを救うということにおいて全能の神であります。

私たちが身を寄せて隠れ、避けどころとする神は、私たちの救いの神であり、そこに私たちの命の逃れ場、避けどころが与えられているということを、聖書は語ります。

ところで、3節に「**神はあなたを救い出してください。**」と語られていますが、この詩編の御言葉は、神が一体何からわたしたちを救い出す方だと言っているのでしょうか。3節には「**仕掛けられた罠から、陥れる言葉から。**」とあります。この御言葉が見つめているのは、敵意や悪意を以て信仰者を陥れようとする力です。敵の存在が見つめられています。たとえば、今日開かれているのは詩編ですから、ダビデの生涯ということをおもひ起こしてみましても、その生涯には「**仕掛けられた罠**」「**陥れる言葉**」とあるような、その歩みを妨げ、陥れようとする力が働いていたこと、そのことでダビデどれほど悩み苦しんだかということを知ることができます。私たちも、このダビデと同じような境遇におかれ、そこにおいて苦しむという経験をいたします。しかし、そこで4節に「**4 神は羽をもってあなたを覆い、翼の下にかばってください。神のまことは大盾、小盾。**」とありますように、神に守られるのだと聖書は語ります。陥れる力よりも、仕掛けられた罠の危険よりも、はるかに大きく確かな神の守りの中に、私たちは生かされ、支えられていのだということです。

6節には、また別の、人間を苦しめ、生きることを妨げる力が見つめられています。ここには「**6 暗黒の中を行く疫病**」そして「**真昼に襲う病魔**」ということが語られます。この疫病とか病魔というのは、人間がどうすることも出来ない、コントロールすることのできない力です。

聖書の中には、神の民である人々の命が、疫病によって危険にさらされ、人々の生活の糧である農作物に病気が蔓延したり、バッタやイナゴが襲来をしてそれらを食い荒らしたりということが幾度となく記されています。しかし、聖書の時代だけでなく、歴史を振り返ると、わたしたち人間は長い歴史の中で、しばしばこのような疫病であったり病魔と言われるようなものによって、命が危険にさらされたり、失われていったりしたことが判ります。

宗教改革者のマルティン・ルターが生きた時代もそのような時代でした。ペストが流行をいたしました。ルターは1527年8月に、信頼を寄せていたシュパラティンに、次のような手紙を書きます。

「**ペストがここでも発生しました。人々の恐怖は大きく、ここから避難しようという人も大勢で、・・・サタンは人々をひどく脅えさせ、その心をくじくことに成功しました。・・・人々はあまりにもひどく恐れています。**」(*ゲオルク・シュパラティンへの手紙 1527年8月19日より抜粋)

ルターのこの言葉は、事柄の本質を見抜いた言葉であると思います。ルターは、ただペストが発生したという事だけを伝えているわけではありません。このルターの手紙は、ペストの流行によって、人々が恐怖に捕らわれ、ひどく恐れていると伝えています。ここに、ペストがもたらした一つの深刻な問題がありました。ルターはこの手紙の中で、死者はあまり多くはなかったと書いているのですけれど

も、この時にルターが感じたのは、人々の心がひどい恐れに捕らわれ、社会全体も危機に直面していたということでもあります。そしてその時代の教会もまた、この深刻な痛みの中に置かれ、そこで生きたということでもあります。

ルターはこのシュパラティンへの手紙を、このように結んでいます。「**だからわたしは、ここに留まります。人々がひどい恐れに捕らえられているので、わたしはここに留まることが必要です。・・・キリストも、ここにいてくださるので孤独ではありません。罪を生み出す『年を経た蛇』が、どんなにキリストのかかとを砕いても、キリストが勝利を治めて下さいます。**」

ルターは、人間が恐れに打ち勝って生きるために、命を呑み込もうとする悪しき力に打ち勝つために、福音が必要であり、キリストの勝利が既に備えられていることを信じ、語りました。

今日、この礼拝において開かれている詩編 91 編も、私たちに神の救いを宣言します。5節以降には、このように記されています。「**5 夜、脅かすものをも、昼、飛んで来る矢をも、恐れることはない。6 暗黒の中を行く疫病も、真昼に襲う病魔も。7 あなたの傍らに一千の人、あなたの右に一万の人が倒れるときすら、あなたを襲うことはない。・・・(9節から11節) 9 あなたは主を避けどころとし、いと高き神を宿るところとした。10 あなたには災難もふりかかることがなく、天幕には疫病も触れることがない。11 主はあなたのために、御使いに命じて、あなたの道のどこにおいても守らせてくださる。**」この御言葉は、神が私たちを見守る方であり、主はみ使いに命じて、私たちの道のどこにおいても、つまりどのような時にも、どのような境遇にも、私たちを守り、救う方であると告げているのです。神の御言葉が救いを宣言し、わたしたちの魂に慰めと平安の場が何時如何なる時にも備えられていることを告げているのです。

改革教会で多くの人に読まれ、大切に受け継がれてきた「ハイデルベルク信仰問答」の第一問には次のようにあります。「【問】**生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。**」答えはこうです。「【答】**わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。この方はご自分の尊い血をもってわたしのすべての罪を完全に償い、悪魔のあらゆる力からわたしを解放してくださいました。そして、天の父の御旨でなければ、髪の毛の一本も落ちることが無いほどに、わたしを守ってくださいます。実に、万事がわたしの救いのために働くのです。・・・**」

今日の詩編には、主は「御使いに命じて、あなたの道のどこにおいても守らせてくださる」とありました。この神は、み使いだけでなく、ご自分の愛する独り子さえも世に遣わして、私たちの救いを成し遂げて下さいました。そのキリストの十字架を通して、わたしたちは「**体も魂も、生きるにも死ぬにも**」キリストのものとしており、いついかなる時も、魂の避けどころ、逃れの間を与えられていることを感謝と共に覚えたいと思います。